

万博を終えての人々への讃歌



入江政安
論説委員会幹事長
大阪大学大学院
工学研究科教授

原稿執筆は 8 月であるので、現時点でこのようなことを書くのは憚られるが、大阪・関西万博は前評判を覆す結果になろうとしている。なかなか関西圏以外の方には理解しがたい雰囲気であろうが、そこかしこでキャラクターグッズをぶら下げた若者を見るし、話題がなければ「万博行きましたか？」に続いて「何回行きましたか？」と聞くような具合で、少なくともこのあたりだけは盛り上がっている。「万博は失敗する」とマスメディアに言われつづけると、「そうはさせじ」と党派を超えて、関西人持ち前の判官贔屓あるいは地元愛を発揮するのもまた型どおりである。「70 年の万博は簡単に海外に行けなかった時代のもので、今のように海外に行きやすい時代に万博なんて」という批判は甚だ見当違いで、気づけば、折からの円安とコロナ禍後の航空券の高騰で、2025 年は簡単に海外に行けない時代の中にある。地下鉄に乗って海外のショーケースをいっぺんに見ることができ、パビリオンや展示物にとどまらず、待ち行列の並ばせ方にさえお国柄が出て、心意気の違いまで感じられる、そんな貴重な機会を逃すまいと思うのも当然である。

万博の開催に向けて多くの事業が進められてきた。会場への大阪メトロ中央線や阪神高速淀川左岸線の延伸、関西国際空港のターミナルのリノベーションなどだけではなく、いつの間にか、大阪のミナミの中心、なんば駅の駅前は 6000 m² を超える歩行者天国になっているし、キタの大阪駅前には大きな芝生の広場ができている。市の中心部に向かえば、そこはあの、なんとも言えない川の匂いのする、川に背を向けた中ぐらいのビルが建ち並ぶ大阪ではない。正直言って、少し寂しい感じさえもする。自動運転バスやら、空飛ぶクルマやら、顔認証の改札口やら、一部はさんざん失敗もしながら、新しい取り組みが始まっていて、こうも土木や科学は都市に刺激を与えられるのか、と感動さえする。1 つ 1 つの施策は担当者の地味な努力と汗で実現している訳で、2025 年に向けて、少し“ようけめ”に協力し、少し“ようけめ”をお願いして

回った結果である。多くの公共投資がなされ、それへの批判は今後も続くかもしれない。しかし、間違いなく、1970 年万博のレガシーがこの地に残されたように、2025 年のレガシーもこの地の気っ風となり、残り続けるだろう。多くの子供たちに将来の夢を考えるきっかけを与えたことだろう。B/C の費用対効果の分析手法に反対というわけではない。ただ、C には載せられない人々の努力が、また B としては計れない将来への種まきとなっている。そのことを少し強めに言っても良い。

土木自身はどれくらい種まきをできただろうか。会場では、心筋シートや人工心臓、藻類による創エネルギーなどに注目が集まっていた。藻類による創エネルギーは土木も関連しているだろう。では、高炉スラグや廃ガラスを利用した環境配慮型コンクリートに子供たちは気づいてくれただろうか。毎日、新大阪あたりの地下鉄御堂筋線に乗っている中高生は、淀川を渡河してから、急に曲がって降りていくランプがいかにも狭そうなヤードの中でみるみる建設されていく様子を見てくれただろうか。できたものの素晴らしさをアピールするだけではなく、やっていることの素晴らしさをアピールできればよいのに、と願う。私たちが力を入れて、現場がイノベーションを起こしているのはその部分なのだから。

もし 2025 年万博がなかったら、もちろんここまでの公共投資はなかっただろうし、大阪の街は東京や世界の都市の発展から取り残され、やや眠たさの残った、私の好きなあの街のままであったに違いない。万博が終わり、すべてが一段落する中で、また、大阪はインバウンドを受け入れつつ、一方で、一部で過疎化が進む一地方都市である現実には引き戻される。しかし、都市が変わり続けることがこれほど刺激を生み、人々の行動に変化を生むことを知り、私たちがその意識をもち続けていれば、日々の仕事が生む変化こそがその現実には抵抗する手段だと言えるかもしれない。また、大きな仕事がなくとも擁壁や舗装、堤防法尻の補修さえも、地域に小さな刺激を与えることを期待できるし、その仕事を信じられる。万博の開催に向けて頑張った皆様ありがとう。また、これからもよろしく願います。